

2020. 4. 5 第一主日礼拝（棕櫚の主日）

イザヤ 53:1-12 「痛みを担われた悲しみの人」

聖書

- 1 私たちが聞いたことを、だれが信じたか。主の御腕はだれに現れたか。
- 2 彼は主の前に、ひこばえのように生え出た。砂漠の地から出た根のように。彼には見るべき姿も輝きもなく、私たちが慕うような見栄えもない。
- 3 彼は蔑まれ、人々からのけ者にされ、悲しみの人で、病を知っていた。人が顔を背けるほど蔑まれ、私たちも彼を尊ばなかった。
- 4 まことに、彼は私たちの病を負い、私たちの痛みを担った。それなのに、私たちは思った。神に罰せられ、打たれ、苦しめられたのだと。
- 5 しかし、彼は私たちの背きのために刺され、私たちの咎のために砕かれたのだ。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、その打ち傷のゆえに、私たちは癒やされた。
- 6 私たちはみな、羊のようにさまよい、それぞれ自分勝手な道に向かって行った。しかし、主は私たちすべての者の咎を彼に負わせた。
- 7 彼は痛めつけられ、苦しんだ。だが、口を開かない。屠り場に引かれて行く羊のように、毛を刈る者の前で黙っている雌羊のように、彼は口を開かない。
- 8 虐げとさばきによって、彼は取り去られた。彼の時代の者で、だれが思ったことか。彼が私の民の背きのゆえに打たれ、生ける者の地から絶たれたのだと。
- 9 彼の墓は、悪者どもとともに、富む者とともに、その死の時に設けられた。彼は不法を働かず、その口に欺きはなかったが。
- 10 しかし、彼を砕いて病を負わせることは主のみこころであった。彼が自分のいのちを代償のささげ物とするなら、末長く子孫を見ることができ、主のみこころは彼によって成し遂げられる。
- 11 「彼は自分のたましいの激しい苦しみのあとを見て、満足する。わたしの正しいしもべは、その知識によって多くの人を義とし、彼らの咎を負う。

12 それゆえ、わたしは多くの人を彼に分け与え、彼は強者たちを戦勝品として分かち取る。彼が自分のいのちを死に明け渡し、背いた者たちとともに数えられたからである。彼は多くの人を罪を負い、背いた者たちのために、とりなしをする。」

はじめに

本日はイエスさまがエルサレムに入京された棕櫚の主日(パームサンデー)です。人々は「ホサナ、ホサナ」(ホサナとは「今、お救いください」という意)と言って、ろばの子に乗られたイエスさまを木の枝を道に敷きエルサレムに迎えたのです。今こそイスラエルの敵を粉碎し国を復興してくださる王として、まさに救世主としての期待がイエスさまに注がれ、歓喜の内に都エルサレムに迎えられたのです。しかし、その期待も虚しく金曜日には十字架につけられ殺されてしまいます。それゆえにこの週を「受難週」と呼びます。2/26(灰の水曜日)から始まった今年の受難節のクライマックスとなるわけです。今日は受難週の意義を最もよく表す「主のしもべ」ということばに心を向けてみましょう。イザヤ書53章に記された「主のしもべ」の姿がイエスさまを指し示していますので、そこから「主のしもべ」とはどのような者なのか思い巡らしてみましょう。

1. 主のしもべとは

イザヤ53章には苦難の道を辿る主のしもべの姿が描かれていますが、実はその序文に当たる部分がイザヤ52:13-15にありますから、52:13-53:12までを一つの括りとして見るのが良いです。イザヤ52:13に「見よ、わたしのしもべは栄える。彼は高められて上げられ、きわめて高くなる。」とあり、高められた栄光の姿が描かれています。「主のしもべ」であるメシヤがその使命を果たし、高くに引き上げられた栄光の姿です。この栄光の姿こそが救い主イエス・キリストを指し示しているのです。栄光の姿ならばそこには勝利者の姿が描かれているはずですが、しかし、「多くの者があなたを見て驚き恐れたように、その顔だけは損なわれて人のようではなく、その姿も人の子らとは違

っていた。」(52:14)とあるように、およそ栄光の姿とは思えない姿が描かれています。

私たちが思い描く栄光の姿、すなわち勝利者の姿と神さまが示された栄光の姿とは全く違うものでした。両者の姿が真逆であるために、人は神さまの示す栄光の姿を受け入れることができないのです。このギャップを埋めるために、人は神さまが示した栄光の姿を退け、自分が思い描いた栄光の姿に軍配を上げました。その結果が、キリストの十字架でした。「ホサナ、ホサナ」と言って勝利をもたらしてくれる救世主としてイエスさまを迎えましたが、その期待が裏切られたとき、人々は「十字架につけろ」と叫ぶ人々に化してしまったわけです。私たちには理解しがたい、神さまの示された栄光の姿、すなわち「主のしもべ」の姿とはどのようなものだったのでしょうか。

2. 主のしもべの姿

主のしもべは、神に仕える栄光に富んだものであるにもかかわらず、その実は「彼には見るべき姿も輝きもなく、私たちが慕うような見栄えもない。彼は蔑まれ、人々からのけ者にされ、悲しみの人で、病を知っていた。人が顔を背けるほど蔑まれ、私たちも彼を尊ばなかった。」(2,3 節)とある惨めなものでした。栄光ということばからは想像もできないこのような姿を誰が思い描くことができたのでしょうか。誰も思い描くことができませんでした。それどころか、誰もこのような者にはなりたくないと思いました。人々からあざけられ、のけ者にされるような者にはなりたくない。

その惨めな姿を招いた原因が自分にあるのならまだしも、そうではないところにもっと理解しがたいものがあります。「彼は私たちの病を負い、私たちの痛みを担った。…私たちの背きのために刺され、私たちの咎のために砕かれた」(4,5 節)とあり、蔑まれ、のけ者にされ、悲しみを負い、病を背負った理由はご自分のためではありませんでした。それは、私たちのためでした。私たちが蔑まれ、のけ者にされ、悲しみと病を負うとき、その痛みをこの方

は代わりに背負ってくださったのです。自らが私たちの痛みをすべて引き受けてくださり、神に背いた者たちの身代わりに刑罰を受けてくださったのです。「主のしもべ」とは人の罪や咎、痛みを担う者であり、それがキリストの十字架の意味するところでした。人は実に多くの傷を負っています。その傷は自らの罪から来るものもあり、人から背負わせられたものもあります。誰にも触れることのできない私たちの傷をイエスさまは代わりに背負ってくださり、私たちに癒しを与えてくださったのです。「彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、その打ち傷のゆえに、私たちは癒やされた。」(5節)。このことばをもって、人が抱える痛みの癒しが宣言されたのです。

3. 苦難のしもべ

人の痛みを抱えることが「主のしもべ」の道なので、その道を歩むことはとても重く痛いのです。キリストの苦難の道を「ヴィア・ドロローサ」と言います。最後の晩餐の後、逮捕され不当な裁判にかけられ、鞭打たれ、十字架を担がされて刑場に向かう道を指しています。「屠り場に引かれていく羊のように、毛を刈る者の前で黙っている雌羊のように、彼は口を開かない。」

(7節)と、もはや抵抗する力も奪われ、なされるがままの姿です。当時刑が執行される時通常は、刑場についてから鞭打たれたそうですが、イエスさまは刑場に向かう前に鞭打たれていますから、自分がかげられる十字架を刑場まで背負って歩くだけの力が残っていませんでした。なので、兵士たちはそこを通りかかったクレネのシモンにイエスさまの十字架を担がせたのです。「主のしもべ」それは「苦難のしもべ」であり、その道は十字架の刑場に向かうイエスさまの道でした。

先々週の礼拝で賛美しました子ども賛美歌「ゆるすためです」の歌詞が心に響きます。「赦すためです 主の十字架 払いきれない 死の代価 嘲られても 打たれても 祈られたのは だれのため」「赦すためです 主の十字架 滅ぶばかりの このいのち 茨のかむり 釘のあと 耐えられたのは だれのため」と賛美しました。この賛美の「だれのため」というところに入る名

前は誰なののでしょうか。イエスさまは罪と傷によって痛んだ私たちを背負って苦難の道を歩んでくださったのです。入るべき名前は私たち一人一人の名前なのではないのでしょうか。

4. 勝利者である主のしもべ

苦難の道が重ければ重いほど、その道をもし自分が歩まなければならないとしたら、私たちが真っ先に考えるのは、どうしたら回避できるだろうかということではないのでしょうか。しかし「主のしもべ」は神さまのご計画を受け止めて歩む者でなければなりません。とするならば、父なる神さまのご計画がどこにあるのかを知らなければなりません。

「主は私たちすべての者の咎を彼に負わせた。」(6 節)、「彼を砕いて病を負わせることは主のみこころであった。…主のみこころは彼によって成し遂げられる。」(10 節)と述べられています。父なる神さまがご自分の愛するひとり子であるイエス・キリストをこの世に遣わし、イエスさまに人のすべての罪を負わせ、その打ち傷によって癒しを与えるご計画を、いまここで成し遂げようとされているのです。苦難のしもべを通して、人間の救いを成し遂げるために、イエスさまの十字架は必然だったのです。人の目からはローマの刑法によって十字架刑に処せられた敗北者です。しかし、神さまの目から見たら、ご自分のご計画を成し遂げた勝利者です。

12 節の「彼は強者たちを戦勝品として分かち取る。」という表現が勝利者の姿を表わしています。それは「彼が自分のいのちを死に明け渡した」(12 節)結果でした。人の目に映る歴史の背後に神さまのご計画があることを忘れてはいけません。聖書によって明らかにされた、歴史の背後にある神さまのご計画に目を留めましょう。なぜなら、神さまのご計画の目的は私たちに救いをもたらすことであり、その結果地に平和と祝福をもたらすことであり、さらには永遠のいのちをもってキリストと共に世界を治める「救いの完成」をもたらすものだからです。この究極の目的を知っている「主のしもべ」は

「彼は自分のたましいの激しい苦しみのあとを見て、満足する。」(11節)のです。その満足は神さまの御心に従い通したところの満足であり、その結果が人の救いとなって届くところの満足です。「この方は、ご自分の前に置かれた喜びのために、辱めをものともせず十字架を忍び、神の御座の右に着座されたのです。」(ヘブル 12:2)。多くの人を受難ということばから思い描くイエスさまの御顔は、痛みと苦しみに歪んだ顔であり、侮辱と辱めに耐えた顔でしょう。2004年に公開された「パッション」という映画に見るような激しく苦悩する姿です。しかし、見えるところはそうであっても、イエスさまの心の中は満足と喜びで満ち溢れていたのです。表側の顔と内側の顔、どちらも真実ですが、今年を受難週は内側の顔に目を向けてみませんか。イエスさまの十字架の御顔に喜びを見出すことができたら幸いです。十字架の上から喜びと満足の御顔が私たちに向けられていることを知ることができる週でありますように祈ります。

まとめ

受難週の始まりに「主のしもべ」の姿に心を向けました。それはイエスさまの姿でした。蔑まれ、罵られたのは、誰のためだったのでしょうか。そこに私たち一人一人の名前を数えることができれば幸いです。主は私たちのために病を担われた悲しみの人でした。ご自身が悲しまれたので、悲しむ者を慰めることができますのです。痛む者を癒すことができますのです。受難週を感傷的に過ごす過ごし方もあるでしょうが、十字架の道の中に救いの完成という喜びを見出す過ごし方もあることを覚えて、意義深い一週を歩みましょう。来る主の日はイエスさまの復活をお祝いする復活祭(イースター)です。喜びを携えて共に礼拝の場へと上ることができますように祝福をお祈りします。